

柴田南雄音楽評論賞の第六回は、受賞者なしということになった。残念という以上に、困惑している。音楽の現状のみならず、芸術の現状について、何か深刻な地殻変動とも言うべきものが進行していると思わざるをえない。

たまたま、八月二十一日、サントリー芸術財団50周年記念シンポジウム 日本音楽界の50年とこれから」がサントリーホール小ホールで行われていて、ほぼ同じ問題が論じられていることに気づいた。シンポジウムは、渡部裕、片山杜秀の講演と、長木誠司の司会のもとに白石美雪、沼野雄司、野々村禎彦らが討論会を行うというものだったが、討論会が最終的に問題にせざるをえなかったのが同じ問題だったのである。

いわゆる西洋クラシック音楽という領域が年を追うごとに縮小し衰退しているという事実は、たとえば往年のレコード店の棚を占める比率からさえ、たやすく見て取ることができる。往年のレコード店というのは、いまではアマゾンをはじめとするネット通信販売にほとんど肩代わりされていると思われるからだ。通信販売においても同じ事態が進行していることは疑いない。シンポジウムでは沼野雄司がまさにレコード店の棚のありようの推移からこの五十年の音楽界の変容を自身の体験として語っていた。

一九六〇年代、モダンジャズは知識人学生に不可欠の教養としてあったが、半世紀を経た現在まったく違ってしまった。いわば老人の懐古趣味の象徴になってしまったのである。ほぼ同じことが、一九一〇年代から三〇年代に始まり、七〇年代、八〇年代に全盛を迎えた西洋クラシック音楽についても言えるだろう。聴衆の老齢化は、サントリーホールをはじめ、東京文化会館などにおいても、日々体験するところであって、まさに一目瞭然、会場に足を踏み入れた瞬間に痛感するところである。

ジャズもロックもポップスもサブカルチャーと言われてきた。いまや同じように西洋クラシック音楽もサブカルのひとつになったのである。柴田南雄音楽評論賞は、そのサブカルのひとつである西洋クラシック音楽をいかに深く論じることができるかを競い合う評論コンテストのひとつであるということになる。

むろん、西洋クラシック音楽の強みは、その広がりや度合い、深まりの度合いが、他のサブカルを文句なしに引き離しているところにある。西洋クラシック音楽が、カント、ヘーゲル、ニーチェと展開するいわゆるドイツ古典哲学と、ほとんど双子の関係にあることは、アドルノの存在ひとつに明らかである。

たとえばつい最近独訳された話題になった梅津時比古のシュューベルト論は、『零の旅』を手がかりに、いわば実存主義の先駆としてのシュューベルトを浮き彫りにするもので、最終的に、ニーチェはワグナーではなくシュューベルトの影響下にあったという瞠目すべき結論にいたる画期的な評論だが、こういう芸当ができるのは西洋クラシック音楽ならではのであって、他の領域においてできるはずもない、と思わせる。

だが、必ずしもそうではない。大和楽という邦楽の流派があって、趣味人として知られる実業家・大倉喜七郎が昭和初年代に創始したのだが、邦楽に和声を導入したものと思えばいい。この大和楽、日本舞踊の創作に利用されること少なくないが、私見では歌舞伎にはまったく合わない。竹本すなわち義太夫以降、常磐津、富本と語り物の系譜があり、唄い物の長唄が別系譜としてあって、そのフュージョンとでも言うべきものが清元である。すべて歌舞伎音楽と言っているが、ときに西洋風に響く大和楽の和声は、これらと違って、封建制度に打ちひしがれた歌舞伎の陰惨な美学にはまるっきり合わないのである。

邦楽研究者に梅津に匹敵する存在があれば、これが取り上げるに値する主題であることは疑いない。義太夫はむろんのこと、常磐津、清元、何であれ、奥行きの深い芸談は山ほどある。対応する日本の哲学が存在することは、歌舞伎に先行する能・狂言がそうであるのと同じである。

サブカルといえ、昔、浮世絵、今、アニメ、である。浮世絵が西欧において芸術として認められたことで当時の日本人が驚き喜んだことは有名な話だが、手塚治虫から宮崎駿にいたるまで、欧米の研究者は少なくないと聞く。サブカルという呼称に怯むことはない。サブカルもまたすべて深遠な芸談を秘めているのである。西洋クラシック音楽であれ、西洋抽象表現主義絵画であれ、権威主義的教養制度によってカルチャーに祭り上げられただけで、呼称がサブカルになったところで痛くも痒くもない。困るのは、なお権威主義的教養制度に寄りかかっている音楽学校、美術学校くらいのものであって、それさえもケージとウォーホル以降は芯の部分に痛撃を受けているのだ。世に広く行われている音楽コンクールなるものは、カルチャーとサブカルチャーの危うい境界そのものに見える。

問題は、今回の応募作のほぼすべてに、この文化の地殻変動を広い視野に立って俯瞰する眼が欠けているように思われることである。現代文明のなかで、音楽をはじめとする芸術は、いまどういう状況にあるのか、いや、現代文明そのものがどういう状況にあるのか、批評はそういう俯瞰する眼を抜きに成立しえない。

西洋クラシック音楽を支えてきた権威主義的教養制度は、すでに崩壊して久しい。ドイツを占領したアメリカ軍とその文化政策者は、遅れてきたもののつねとしてドイツ古典哲学もドイツ古典音楽も大いに尊敬していたが、現実には、兩次世界大戦こそが教養制度の崩壊を告げる事態としてあったのである。ドイツの二度の敗戦は、結局、十八世紀までは音楽の国はイタリアであってドイツなどではなかったこと、ドイツが音楽の国へと変容する過程はプロシヤが肥大してゆく過程と軌を一にしていたことを明らかにしたのだ。

西洋クラシック音楽とりわけドイツ音楽を崇めることに異存はない。ニーチエに影響を与えたのはワグナーではない、シューベルトだという梅津の指摘は、今後のニーチエ研究ひいては実存主義研究に少なからざる影響を与えるだろう。だが、それが意味するのは、背後に、音楽の現状、芸術の現状を俯瞰する広い視野を持っていたからなのだ。